

倭の女王

●倭の女王ヒミコと纏向上之宮／日前の西都と日高見国の東都

一二〇年代前半、纏向宮づくりが進む最中に、天照大神が俄かに逝ってしまった。享年七十余歳だった。その後の彼女は舅や夫の大葬に追われたが、一息つくると夫の天照大神の地位を引き継ぎ、倭の女王ヒミコに立っていた。

月日が経つて上之宮（巻向駅北、辻・巻野内）と呼ばれる宮殿が晴れて落成すると、素戔嗚は卿となつて兵主なる最高位（大将格）に昇り、邪馬台国軍を一手に握った。それと同時に、親衛隊を率いて宮殿警護にあたつた。太夫となつた大己貴も、射楯の神として都周辺や市場近辺に数多の将兵を繰り出し、治安維持に目を光らせてきた。

この時期、つまり三世紀前半、纏向に突如として巨大な都市が出現した。その大きさは巻向駅を中心にして東西二キロメートル、南北一・五キロメートル、広さ四平方キロメートルに及び、唐古・鍵や吉野ケ里を凌いで邪馬台国時代の最大都市に発展していく。

この都市が拡大する頃、纏向地区に最古の纏向石塚古墳が造られた。その後、南の箸中地区でも、矢塚古墳、勝山古墳、東田大塚古墳、ホケノ山古墳など纏向型と呼ばれる出現期大型前方後円墳が矢継ぎ早に築造された。

【纏向遺跡】（奈良県桜井市）、三世紀に始まる遺跡で、ここから一万枚以上の檜矢板を打ち込んだ大溝とともに、多量の土器が出てきた。その中には南関東・東海・北陸・近江・出雲・西瀬戸内海沿岸の土器が十五〜二〇%も占める。その半数近くが東海系の土器、ついで出雲系が多い。

【纏向石塚古墳】、箸墓古墳などの前方後円墳が定型化する以前の全長九六メートルの帆立貝形前方

後円墳で、周濠から大量の土器、弧文円板と呼ばれる木製品が出た。同じ模様は楯築神社の神石にもある。最古の土師器が出土する纏向型前方後円墳の典型とされており、三世紀初頭の築造とする考えや、三世紀後半の築造とする考えがある。

【勝山古墳】、平成十三年の橿原考古学研究所の発表によると、この古墳の周濠くびれ部埋土中から大量に見つかった檜材は、年輪年代測定法による調査の結果、西暦二〇三年から二一年にかけて伐採された木とされ、伐採後すぐに古墳上に建立されたらしい。

勝山古墳の築造期がヒミコの時代と重なることで、これまで弥生時代とされてきた邪馬台国時代が、古墳時代と判定されるに至った。一方、同時に出土した土器が従来の年代測定法では三世紀後半にあたることから、以下の指摘もある。

「木材の伐採年と古墳築造時期を同一視する考え方、もしくは土器の年代測定法や年輪年代測定法のいずれかに問題がある」

【東田大塚古墳】（桜井市東田）、全長九六メートルの葦石された纏向型前方後円墳で、円墳部のみに幅二〇メートルの周濠を伴う。三世紀後半の築造とされる。

【ホケノ山古墳】（桜井市大字箸中）、古墳時代前期初頭に、箸墓古墳東の丘陵に築かれた全長八〇メートルの帆立貝形前方後円墳で、葦石と周濠を伴う。副葬品や埋葬施設から、箸墓古墳や椿井大塚山古墳で代表される定型化した出現期大型前方後円墳の時期をあまり遡らない三世紀前半と中葉の纏向型前方後円墳と見られている。

後円部中央に設けられた石囲み（長さ七メートル、幅二・六メートル、高さ一・五メートル）内にコウヤマキ製の木槨が設けられていて、そこに平縁の画文帯神獸鏡一、素環頭太刀一口、鉄製刀剣類十口などが残されていた。木槨内部は水銀朱で覆われていた。

宮中での女王は、千人の侍女を侍らせる中で、鬼道を操りながら祭祀と政治を行う祭政一途に勤

しんできた。

大事を決する際には、そのつど祭場を設けて、分身の瀬織津姫を神憑りする巫女として傍らに侍らせながら、天照大神のお告げを請うた。すると、天照大神が瀬織津姫に乗り移ってきて神託について細々と口寄せした。

女王と分身は鬼道に熱中するあまり、天照らす大日靈、おおひるめむち大日靈貴、またはいつのみたまあまさかるむかつ嚴之御魂天疎向津媛

と呼ばれた。貴は貴人に対する尊称、日は日の神を表す。靈は両手に玉と鈴の呪具を持ち、神憑りして先祖のお告げを語る巫女の意で、この名は鬼道に仕える日の御子、日巫女と言うに等しい。

☆瀬織津姫が天照大御神から引き継ぐ嚴之御魂天疎向津媛なる異名から、二人は共に天之国を離れて（天疎）、嚴之国に移籍（嚴之御魂）したのが見て取れないか。

この時から、三輪氏らが主導した嚴之国王朝は、高天（倭）一門の天（水）之国に吞み込まれた。だがその実体は、嚴之国王朝の上に天（水）が覆い被さったものだだった故、天（嚴）之国王朝（倭国）と呼んでおく。以後、天（水）が新王朝を主導することで、畿内の鉄器づくりが勢いづいた。ここにヒミコ率いる高天は、晴れて倭国と語ることができたのである。

この状況下で、ヒミコは石凝姥に対して、

「真経津鏡と同類の鏡（これも八咫鏡と呼ぶ）を即位式までに量産せよ」と命じた。

火瓊瓊杵はこの時になって初めて、自身の持つ日の像の八咫鏡（最初に鑄込まれた鏡）が天璽でないこと知った。しかも、天璽の剣まで召し上げられたことに憤慨したが、天孫として日神に仕えることを固く誓ってきた彼は、ヒミコに逆らうことだけは避けた。

日が経って即位式が間近に迫ると、薩摩から火瓊瓊杵、日高見国からも天火明が駆けつけた。

【海部氏系図本系図】 始祖彦火明——〇——〇——三世孫倭宿禰（珍彦）——武振熊

「大祓の詞」、「此く依さし奉りし四方の國中と大倭
ひだかみのくに やすくに
日高見国を安国と定め奉りて、下つ磐根に宮柱太敷き立
て 高天原に千木高知りて皇御孫命の端の御殿仕え奉り
て・・・」

「出雲国造神賀詞」、「大穴持の申し給わく、『皇御孫尊
の静まり坐さむ大倭国』と申して、己の和魂を八咫鏡に
取りつけ、倭の大物主、櫛甕玉尊と称えて大御和の神奈
備（桜井市大神神社）に坐せ、己の御子、味スキ高彦根
尊の御魂を葛木の鴨の神奈備に坐せ（御所市高鴨神
社）、事代主の御魂を宇奈堤に坐せ（鴨都波神社）・・・」

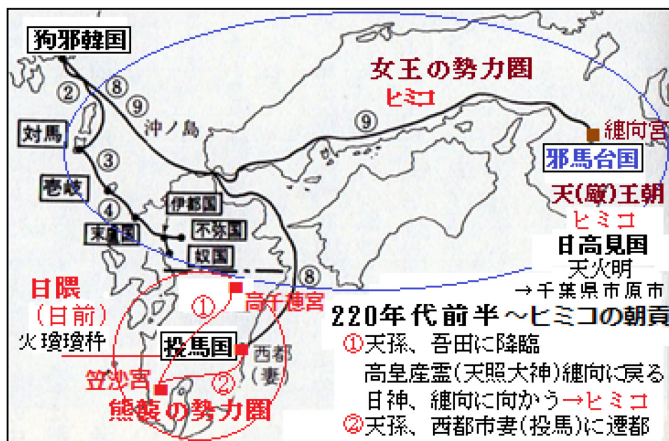
皇御孫に近き守り神と奉りおきて」

☆ここに言う彦火明は皇御孫の天火明、大穴持は天照大
神、大国主神は大己貴命のことだ。

式当日には、紀伊の五十猛（天日槍）を初め、西海・出雲・
吉備・近畿・南海・北陸・東海の豪族らが一人残らず参集して
きた。

ヒミコはその晴れの舞台で、将来の国のかたちについて、こ
う披露してみせた。

一、ヒミコは上之宮に居住して、天つ神や侍女千余人を従えながら政務を見る。



一、素戔嗚は政の補佐役も勤めること。

一、大神家は倭家に代わって、筆頭職に就け。倭家は従前の職を辞し、市や交易の監督、租賦の収納、邸閣の管理に専念せよ。

一、火瓊瓊杵は、身の安全や倭との連携を優先して日向に西都を開き、日隈を日前と改名せよ。

一、日高見国の天火明は、日前の後詰となつて走り回れ。いずれ倭倭大國玉も兼ねさせる。

一、大己貴は大神大物主となつて天火明に仕え、天下の国づくりに励め。

ついでヒミコは、新造した八咫鏡を豪族らに一枚ずつ授けて、

「この鏡には、呉の太伯や夫差につながる天之国一門は勿論のこと、夏后帝小康・越王句踐につながる越オロチ族に対しても、心を一つにして国づくりに励むようにとの願いが込められている。皆は国許に戻ったならば、これを祭壇中央に飾つて祖霊と共に祀れ。この鏡に対しては、私に面することく振舞え」

と命じ、それまでの領国を安堵した。

こうして、東西の二朝は統一王朝をうち立てた。大己貴は大神大物主となつて天火明に仕え、この王朝づくりに東奔西走したことで、大穴持と同じく国作大己貴命と称えられた。

『日本書紀』、「大國主神、亦の名は大物主神、または国作大己貴命と号す」

この時期、巨大化の一途をたどつた銅鐸は、近畿・東海などで一斉に山中や土中に埋められた。その時期は、二二〇年代と見られている。その経緯を綴つてみた。

「倭家一門は、大乱最中に天照大神方により替えしたこと、殊のほか優遇され、好き勝手の銅鐸を造つては祭祀三昧に明け暮れてきた。

その結果、近畿や東海の銅鐸は巨大化した。だが、ヒミコはこの国の心変わりを許さず、大神家

が大倭家にとって代わることも黙認してきた。

ヒミコの即位後、所領に戻った大倭家一門は、彼女から賜った八咫鏡を祭壇中央に飾って祖霊と一緒に祀ってみたが、銅鐸を祀り置く場所に戸惑っていた。これまで通りに銅鐸を扱っていると、八咫鏡を疎かにしたと疑われる恐れがあったからだ。そのため、銅鐸の埋め隠しに奔走した

【桜ヶ丘町銅鐸】（神戸市灘区）、灘区桜ヶ丘町の尾根から十四個の銅鐸が出た。ひときわ大きな六号銅鐸は、全高六十三・七センチメートル。埋納時期は、弥生後期かそれ以後とされる。

【大岩山銅鐸】（滋賀県野洲市）、明治十四年、大岩山から銅鐸十四個、昭和三十四年に十四個の銅鐸が出土した。高さ一三五センチメートルの最新式巨大銅鐸は、二〇〇年頃に埋納されたらしい。

【矢野遺跡の銅鐸】（徳島市）、徳島県最大級の弥生集落、矢野遺跡から出土した最新式の巨大銅鐸で、全高九七・八センチメートルもある。埋納された時期は、二〇〇年頃と見られている。

その後、笠沙宮に戻った火瓊瓊杵は日向の西都市妻に遷都して、そこを日前、笠沙宮、西都と呼んできた。「倭人伝」は投馬国と記している。早く言うと、日神の目の届き易い所に移されたのだ。

☆火瓊瓊杵が婿入りする木花開耶姫の妻の国が西都に移ることで、投馬国とも西都の妻（西都市妻）と呼ばれたわけだ。

ところで、大倭に日高見国を建てた天火明や、葦原中つ国平定の任を全うした経津主・武甕槌、それに火瓊瓊杵に随伴した事勝国勝（鹽土老翁、女神大山祇の婿）は、その後どうしていたのか。

天火明が大倭に日高見国を建てた当初から、東国の蝦夷が尾張家所領に頻繁に出没して、人民や農作物を掠め取っていた。これに対して高皇産靈は、かつて、

「東征して領土を一気に拡大し、彼らを北に追い払うか、生け捕りにして南国に送り込め」と下命していた。

天火明が経津主・武甕槌・事勝国勝ら大軍を引き連れ、東海東、関東平野、房総半島、霞ヶ浦周

辺、北関東を短期間に制圧して仙台平野に攻め入り、常陸や陸奥にまたがる日高見国を建てたことは、以下から容易に確認できる。その結果、倭国の領域は再び常陸や陸奥にまで及んだ。文献や考古学からも仙台平野では、弥生中期から水田稲作が始まっていたのは、周知の事実である。

「倭人伝」、「女王国の東、海を渡ること千余里にして、また国あり、皆倭種なり」

『常陸国風土記』「鹿島の神は、高天の原から降って来た」、

「経津主は、天から降って来て香取の地に武具を脱ぎ留め、天に帰った」、

『日本書紀』や万葉集引用の『常陸国風土記』逸文、「この地（信太）は、もと日高見」

「景行紀」、「竹内宿禰、東国より還て奏して言さく、『東の夷の中に、日高見国あり』」

『ホツマツタエ』「天火明は、国常立が開いた日高見国（房総・陸奥？）の都で育った」

【杵形遺跡】（仙台市若林区）、約二〇〇〇年前、海岸線から二キロ離れた水田地帯（広さ二〇万平方メートル、標高二メートル）に大津波が押し寄せ、約三〇キロメートル離れた水田地帯（広さ二

【中在家遺跡】（同）、市内東部の河川跡や湿地帯に存在した広さ四万平方メートルの遺跡で、遺跡最下層から弥生中期の鍬・鋤・臼・杵など農具、斧の柄、弓や櫂などが出土した。

【鹿島神社】（茨城県鹿嶋市）、古くは「香島の天の大神」と呼ばれてきた。祭神は大己貴に国ゆづりを迫り、戦わずして葦原中つ国を平定した武甕槌大神。神武天皇は即位元年に使いを送り、勅祭したと伝わる。古くから、鹿を神の使いとしたことで広く知られている。奈良市春日野の春日大社の祭神は、この地から白鹿に乗ってやってきたという。

【鹽竈神社】（宮城県塩竈市）、元来、当地には鹽竈神社のみが鎮座していたが、明治時代に志波彦神社が境内に遷座してきて、現在の正式名称は志波彦神社・鹽竈神社に変わった。

鹽竈神社左宮の祭神は武甕槌命、右宮は経津主命、別宮は鹽土老翁神。鹽竈の由来は、鹽土老が塩の作り方を当地で教えたことにあるという。創祀は随分と古いらしい。

その後、ヒミコは天火明に命じて、日高見国を千葉県市原市惣社に国替えさせ、房総から陸奥まで限なく支配できる東の拠点、東都を築かせ、纏向宮に足しげく通わせた。

要するに、東に天孫天火明の東都、西に天孫火瓊瓊杵の西都が並び立ったのである。

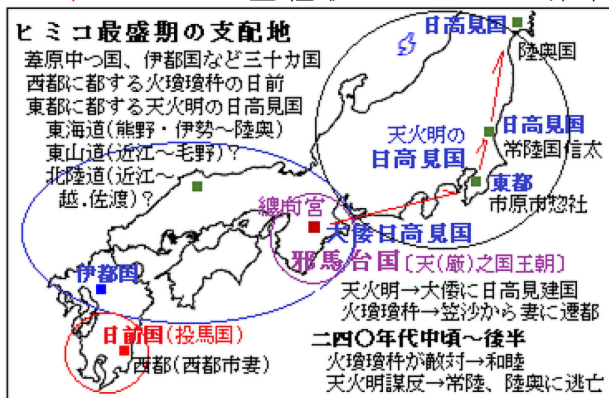
女王ヒミコが纏向に都して、南九州から北の陸奥まで統治したことや、天火明が纏向宮近くにあった大倭日高見国を房総に遷して東都を開き、当時の東海道（伊勢・尾張・総・常陸・陸奥）を統治したり、東山道・北陸道にまで力を及ぼしたりしたことは、纏向遺跡・市原市惣社の発掘結果、及び寺沢薫氏の提唱する纏向型前方後円墳が陸奥・九州に散在することから、容易に実証できる。三世紀に栄えた纏向遺跡からは、南関東の土器類が多数見つかったし、市原市神門四号墳の跡地からも纏向三式頃（二五〇年～二七〇年？）の畿内系土器が大量に出てくるからだ。

〔神門（こうど）五号墳説明板〕（千葉県市原市教育委員会、平成二十六年三月）、「邪馬台国時代、西暦三世紀になると、汎列島規模で地域間の交流が活発になります。」

なかで

この時期、国分寺台地区の中台遺跡、南中台遺跡、長平台遺跡、

天神台遺跡などでは、近畿地方（奈良県、滋賀県周辺）や北陸地方（福井県周辺）、東海地方（愛知県、静岡県周辺）、北関東地方（茨城県、栃木県周辺）などの特徴を持った土器が出土し、こうした地域からの移住や交流の地として、国分寺台地区は東日本でも拠点的な地域となりました。



これらの遺跡群を中核とした地域統合の象徴として、神門古墳群（三号、四号、五号墳）がつくられました。また、遺跡群の中心となる中台遺跡では、祭政の場と推定されている神殿風の掘立柱建築跡も発見されています。

周囲に幅六^{メートル}の周濠をめぐらせた五号墳は、高さ五^{メートル}、墳径三〇～三二・五^{メートル}、前方部の長さ一二^{メートル}からなる前方部短小の前方後円墳です。こうした墳形は、前方後円墳が定型化する以前の特徵です。このような古墳は、奈良県桜井市纏向古墳群を中心とし、全国的にも数が限られており、五号墳は東日本において最古の古墳です。三世紀前半の造墓と推定されています。

神門五号墳は、市原における国づくりの過程を明らかにするだけでなく、古墳発生と前方後円墳の起源を考える上できわめて重要な古墳です」

【神門五・四・三号墳】（市原市惣社）、発掘調査によると、四号墳（全長四九^{メートル}）、三号墳（全長四七^{メートル}余）の築造期は、三世紀前半から後葉とされる。その中でも三号墳は、纏向東田大塚古墳と同形で、ほぼ二分の一の比率で造られていた。

五号墳からは鉄剣、近江・東海系の鉄鏃、東海系の高坏など祭祀用土器、四・三号墳からも短剣・鉄槍・鉄鏃、東海系の特殊壺・高坏など祭祀用土器が出土した。

三号墳出土の鉄鏃は、ホケノ山古墳の鉄鏃と似ており、時期的にも近いとされる。

纏向型前方後円墳の提唱者、寺沢薫氏は、纏向の石塚古墳や矢塚古墳、神門古墳群中の五号墳・四号墳（千葉県市原市）、津古生掛古墳（福岡県小郡市）がこれに該当するとした。

これ以外にも、纏向地区の勝山古墳・東田大塚古墳・ホケノ山古墳、端陵（木花開耶姫陵、鹿児島薩摩川内市）、臼ヶ森古墳（福島県会津坂下町）など、中国の尺度に倣った規格と類型、畿内系土器を共有する出現期古墳が、出羽・陸奥・毛野・上総・信濃から伊勢・加賀・丹後・備前・備中・長門・伊予・九州各地かけて散在するとわかった。